

# 沖縄からの南米移民の血縁ネットワーク

## —沖縄本島村落の移民家族調査から—

水谷史男

1. はじめに
2. 調査データの概要
3. 移民帰還者の聴き取り記録から
4. 村落にとっての移民、家族にとっての移民
5. おわりに

### 1. はじめに

本稿では、戦前・戦後を通じて沖縄から南米に移民した人々のうち、沖縄本島北部の村落からアルゼンチンに渡航した家族の系譜と親族形成について、われわれが行った調査結果の一部を手がかりに考察する。

日系移民の社会学的研究の対象は、明治末期以来のハワイ、北米、南米各国、そして中国大陸、樺太（サハリン）、南洋、東南アジア地域などに及ぶが、旧日本植民地への移民は時期が限定され敗戦により大半が国内へ引揚げ帰還したこともあり、現在まで続く現地日系人社会を形成するに至らなかったとみられる。

これに対し、南米移民は日本が大戦の敗戦国となったことによって、一時移民の流れは停止したものの、海外移民が再開された1950年代から60年代まで再び南米各地に多くの人々が夢を求めて渡航し、それぞれの生活を築いていった。しかし、日本が経済復興から高度経済成長を達成し、国内での雇用機会の増大と生活水準の向上にともない、海外移民は急速に減少した。

国境を越える移民という現象は、これまで世界各地で発生し、その実態や経済的・社会的影響について欧米を中心とする海外ではさまざまな社会科学的な研究が行われてきたが、戦後の日本では高度成長以後の各種の国内問題に関心が集まり、海外移民はいわば忘れられたテーマだったといえよう。

1980年代後半から日本が外国人労働者を受け入れはじめ、さらに日系人出稼ぎ労働者が多く流入するようになったことで、移民問題は逆の方向から注目されるようになった。つまり受け入れる側の国内問題として意識されるようになった。

それはまず海外からの単純労働力移入の是非が問われ、次に外国人出稼ぎ労働者とその家族の定着をめぐる問題に展開し、外国籍出稼ぎや移民が集住する地域社会の問題に広がった。われわれは社会学的な研究の対象として、この過去の日本からの移民と移民が形成した社会のネットワークを捉えようと考えているが、とくに注目しようと考えているのは、とりあえず3つの点にある。

第1に、どこにいたどのような人たちが、どこを目指して移民に出て行ったのか、まずは地域別の移民送出の時系列的な実態把握である。送出地側の実態と移民先での経験は、それぞれの時点で時代状況を強く反映すると思われるから、移動には地域的な要因と時間的な要因がと

もに作用している。とくに日本からの移民は、長期にわたる戦争という時代を挟むことで、国家レベルの大きな国際環境の変化の影響を受けた。

第2に、それぞれの時点で移民という選択に作用した諸条件がどのようなものであったのか、という問題であり、これには送出側のプッシュ要因と受入側のプル要因の双方をみなければならない。そして最終的には当事者である移民を経験した人々の、みずからの移民経験への意味付けが問題になる。現在時点での評価は、事後的なものであるから、移民で現地に定着した場合も、帰国した場合もそれぞれの時点で、将来に何を期待し、どこでそれを修正したのかが問題になる。

そして第3は、移民や海外出稼ぎという現象が、当事者だけでなくその家族・親族、さらに地域社会に対していかなる社会的効果を与えたのか、あるいは与えなかったのか、という問題である。これを捉えるには長期間の変化の中で移民渡航先の社会との関係とともに、出て行ったもとの土地、そこに残っていた親族や地域社会との関係をみなければならない。日本からの海外移民は、初期は単独渡航もあったが、その後は組織的に移民船を仕立てた集団移民や、家族単位で親族や同郷知人のつてを頼って移民するケースが多かったとみられる。相互扶助的ネットワークの存在が、移民という現象にどのくらい重要な意味をもっていたのか、が問題になる。

これらの課題を、今の時点で実証的に追求しようとするならば、まず当事者である移民先の日系社会で生きてきた一世の人々と、帰国した人を含む日本に残っている人々から過去に関する事実について聞き取る必要があるだろう。日本人会、県人会等の日系社会組織が、これまでも多くの移民の人々の記録を集めてはいるが、個人

の体験談の集積は貴重なだけに系統的・学術的な価値のある分析が必要である。

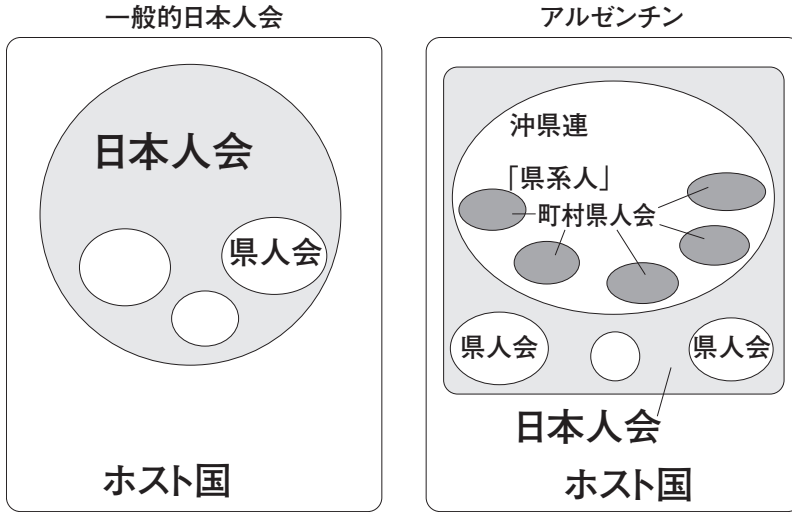
その際、ひとつの注目点は、移民が多く輩出した特定の地域に絞って、個人単位、家族単位の記録だけでなく、村落レベルの移民経験を分析することがとくに意味があると考えられる。

日本からの南米移民の歴史は百年以上、移民の社会的歴史的研究も日系移民が築き上げた日系人口の多いブラジルやハワイ、あるいは北米日系社会については、これまでも多くの研究があるが、移民を輩出した村落単位、家族単位の社会学的研究は少ない。国境を越えた移民または出稼ぎという形態での人の移動現象のうち、血縁と地縁を主たる契機とするネットワークが、出郷の時点と渡航の時点、そして移民先での定着過程で社会的紐帯を強める方向で作用するのか、そうでないのかを、日系移民で移民先から帰還した事例を中心に、移動の動機や背景を含め聞き取り調査をもとに考察する。とくに特定の村落から南米移民に出た人々の、渡航先での家族形成やその後の故郷とのつながりについても個々の家族単位でできる限り追及し、ひとつの村落の中で、どのような家族から移民が出たのか、移民先で血縁・地縁ネットワークはどのような意味をもったのか、なぜ故郷に帰還するという選択をしたのかを考察したい。

## 2. 調査データの概要

ここで用いるデータは、筆者が2008年から2009年にかけて、おもに沖縄本島北部本部町および今帰仁村において、1950年から1960年代はじめまでに南米に移民した人々、とくに既に渡航していた親族を頼ってアルゼンチンに渡った「呼び寄せ移民」で、現地で家族形成して定着し、何らかの事情で沖縄に戻ってきた18名の事例への聞き取りインタビューをもとにしている。さらにそこから得た、戦前から本部町から

図1 日本人会のモデル



アルゼンチンに渡航した家族の子孫の動向を記録したデータと、2008年に訪問したブエノスアイレスで、移民百周年記念行事の一環として、アルゼンチン日系人社会の最大組織「在亜沖縄県人会連合」の行った日系移民へのアンケート結果のうち、本部町の部分とを照合したデータも用いる。

ここで用いる沖縄本島国頭郡本部町における対象事例の家族の渡航時期は、1930年代と1950年代に集中しており、それはそのまま戦前と戦後の南米移民最盛期に重なる。

南米移民といっても、戦前から日本政府が募集し家族で移民船に乗って現地の農園などに集団入植した移民から始まるブラジルやペルー、ボリビアなどの場合と、戦後のごく一時期を除き国家間契約移民をほとんど受け入れなかったアルゼンチンでは、渡航の事情とその後の移民の生活条件は異なり、しかもアルゼンチン日系社会の70%を占めるといわれる沖縄出身者のネットワークは、「県人会」ではなく沖縄内部の村落単位に組織された同郷組織の連合体「沖県連」(在亜沖縄県人会連合)<sup>(1)</sup>によって今も大き

な力を持っている。

ブラジルやボリビアなど、さまざまな県から集まった人々が、移民船で指定された移住地に集団で入植した形の多い所では、家族や血縁ネットワークは強いとしても、同じ村落出身者同士の結びつきはさほど強くない。そもそも同郷者が移民先で日常的に接触できる範囲に、そんなに同じ村落出身者がいる方が例外的であるからだ。そこでは言葉が通じる同じ日本人であるという点が、「日系人」という紐帯を強化すると考えられる。相互扶助と親睦を目的とする県人会組織は各地に作られるが、移民という存在にとってはホスト国においてマイノリティの政治的発言力を代表するのは「日本人会」になる。

しかし、アルゼンチンにおいては少し事情が違っているのである。つまり、アルゼンチンの日本移民は、契約移民の集団入植ではなく(あるいはその入植地を逃げ出して転住して)、個人としてやってきた人と、その呼び寄せによってやってきた同郷の家族・親族から構成されている割合が高い。したがって、村落レベルの同郷者集団が成立し、これが最小単位となって日常的な

相互扶助と親睦の機会を提供し、その連合体として「沖縄連」があり、さらに他県出身者と作る「日会」と呼ばれる日本人会がある(図1参照)。

本部町出身者についても、本部町人会のつながりは緊密で、そのメンバーはほぼパーソナルな人間関係を形成し、近くに住んでいない場合も情報交換は頻繁に行なわれている。このような実態を垣間見るために、以下では聴き取り記録から抜粋する形で具体的に考察してみよう。

### 3. 移民帰還者の聴き取り記録から

それでは、移民帰還者のインタビュー記録から1) 移民した事情、2) 移民先での生活と仕事、3) 帰ってきた理由、4) 移民体験への評価の順にみていきたい。

以下で採用したインタビューのもととなった事例の一覧は表1に示すとおりである。

#### 1) 移民した事情

どのような理由で移民という選択を行なった

のか、について「呼び寄せ移民」、つまり自分の家族あるいは親戚などが先に移民先にいて、そこを頼って行くという形で渡航した例が多い。

[一以下は発言の抜粋 \*は質問者の発言]

一私、1959年に親と一緒に、私長男だから3人で赴任しました。アルゼンチンに直接。これはそのまあ、沖縄の場合は、父は次男。当時までは次男は土地とか何も与えられない。土地がないと仕事がないから、次男、三男は南米に移民する。その前はグアム、ハワイとかいろいろありますけど、その当時は南米が人気あった。南米の国は、国が広くて、人口が少ないから国から大歓迎ですよっていう感じで日本政府から奨励していました。

うちの父は、おじさんのところに行きました。実のおじさんが二人いたんですよ。その人たちがブエノスアイレスに住んでいて、来ていよいよってことで渡りました。沖縄からオランダの船に乗って。船はオランダの貨物船ね。これは私が3歳か4歳のときだったと思うんですけど

表1 聞き取り対象者一覧

事例番号	性別	年齢	移民した人・渡航国と時期
1	男	65	本人 アルゼンチン 1959～1985
2	男	82	本人 アルゼンチン 1955～1975
3	男	90	同じ部落の人 南米 不明
4	男	55	本人 アルゼンチン 1969～1990
	男	53?	本人 アルゼンチン 1970年代に帰国
5	男	58	親戚数名 ペルー 1951～
	男	88	本人 ペルー生まれ 1924に来日
6	女	85?	義理の妹(84歳) アルゼンチン 戦前～
7	男	82	本人 アルゼンチン 1951～1979
8	男	59	本人 アルゼンチン 1968～1981
9	女	55	本人 アルゼンチン生まれ 1954～1976来日
10	男	60?	本人 アルゼンチン 不明
11	男	28?	本人 アルゼンチン生まれ 2002年来日 日系3世
	女	60?	本人 アルゼンチン 1970年代
	女	32?	本人 アルゼンチン生まれ 1990年代に来日 日系3世
12	男	83	本人 アルゼンチン 1951～1980年代
13	男	76	本人 アルゼンチン 不明

ど、9月くらいに出て着いたのが12月だったと思います。私はもちろん覚えていないですけど、母の話では、上海かどっかから通ってきた船らしい。それで、インドからブラジル、ケープタウン、ウルグアイを通過して55日、2カ月か3カ月かけて行きました。(事例1)

戦後の呼び寄せ移民の場合、戦前にアルゼンチンに渡って生活基盤を築いていた兄弟や親がいて、戦後の沖縄での生活が苦しいことから呼び寄せられた人が多いが、戦前のように若い世代が単身で渡航するだけでなく、結婚して家族を形成していた人が、一家で呼び寄せられる例がかなりある。

\*アルゼンチンに行かれたのはいつ頃のことでしょうか。

—昭和30年です。

\*それはむこうにご両親か、親戚が行ってらしたんですか？

—一家内の両親が向こうにいたから。

\*ご両親はずっと前にあちらに行かれていたんですか？

—はい、お父さんだけ先に行って…。

—(妻)自分が10歳のときだったから、昭和11年に行った。

\*後で呼ばれて行ったということですか？

—戦後になってから、お父さんに呼ばれて行ったんですよ。向こうでは結婚できないから。

\*こちらで結婚されて行ったんですか？

—そう。28歳と29歳で、結婚していた。子ども3人連れて…。その時に次女が生まれて6カ月で、アルゼンチンに行きました、船で。

—(妻)お腹に赤ちゃんがいるから、生まれてから。

\*その頃船だとのどのくらいかかりましたか？

—53日間かかった。

\*一緒に行かれた方はいたんですか？

—うちは一家で、他にもブラジルとか、日本からもたくさん乗って300人くらいはいたかな。

—(妻)自分たちのいとこの人もいました。自分たちのいたところには、中城の人もいた。(事例2)

\*移住はご家族全員で？

—そうそう、家族移民ね。10人で行った。兄弟8人と両親とで。呼び寄せ移民っていうのかな。

\*先に親戚が行ってらしたんですか？

—おじいさんの兄弟が行っていたから…あ、9人だったかな。兄貴(長男)が一年先に行っていたから。

\*お兄さんも呼び寄せ移民で行かれたんですか？

—そうそう。(事例4)

これ以外に、女性が単身で渡航する例もある。

「花嫁移民」は、夫と同伴で渡るのではなく、写真結婚で移民先の男性との結婚を斡旋されて渡るものである。この場合、同郷のネットワークが果たす役割が大きいと考えられる。

—ペルーにいらしたお父ちゃんと、まただんなのお父ちゃんと友達だったわけ。同じ字(あぎ)の友達だったから、長男とY子さんと縁結びをしたということ。そういう話は出たけど、家族みな反対だったわけ。

でもお父さんが強制(する形:筆者注)になってしまって、仕方なく行ったわけさ。(事例6)

\*南米へ移民した方の消息は、わかりますか？

—(妻)みんな帰ってきてないね

—今度アメリカで100年祭があるね。とくにこの部落から多くいったのはまずハワイ、それから次がペルー、その次がブラジル、それでだいぶ昔でキューバ。キューバにいった人はほとんど

ど帰ってきてないね。向こうで取り込まれてね。

—(妻) 南洋にいった方はほとんど帰ってきたね。

—南洋はですね、この沖縄の場合は外国は点々と行ったんだが、昭和6年この本部町にはカツオ漁船が24隻あってね。南洋移民、これは船ごと団体で行ったね。(事例3)

移民する動機には、永住ではなく働いてまとまった資産を築いたら沖縄に帰ってくることを予定した「出稼ぎ」意識があった。

—沖縄では食っていけないって、パイナップルを作っていた。さとうきびを作っていた。農業をしていた。そしたらあんまり面白くないわけね、金入らんしね。だから大志を抱いて南米に行った。(事例10)

—何の資格も持たないで入って行った人たちには向こうの方が生活水準も高いってということで、自分の身内や友達も向こうがいいよって。みんな単独で入って、その人たちを頼って。(事例11)

現在と異なり、現地の生活状況に関する情報は乏しかったので、多分に期待を膨らませて渡航を選んだ人が多かったと思われる。戦前はいうまでもなく、戦後も1950年代時点では、アルゼンチンの生活水準と国民所得は、当時の日本の1.6倍<sup>(2)</sup>であったという数字もあるから、豊かな生活ができる国に行くと思ったとしても無理はない。

## 2) 移民した先での生活…移民当初の経験

では、渡航先での生活はどのようなものであったのか。いくつかの事例からは、従事した仕事は野菜栽培や花作りなどの農業、都市部での洗濯業、あるいはカフェ従業員(ただしカ

フェは戦前期に限られるという)などだが、いずれも厳しいものだったと想像される。

—みんな単独で入って、その人たちを頼った。だから沖縄の移民の人たちも最初のころは土で下に何にもないところに、壁立てて草で屋根作ってって感じで、一人が働き始めるとその人を頼って同じ村の人とかが来るけど、早く着いた人が、次の人が稼げるようになるまで面倒を見てあげる。でその人たちが自立したら今度はその人を頼っての繰り返しで1人ずつ支援していく形。

—移住地ってのがあったから。ぼくがアルゼンチンに行ってからボリビアやパラグアイのほうから逃げてきた日本人がいっぱいたよ。(事例11)

—うちの親はお姉さんが行ったから向こうに行って、生活も一緒にしてたし。学校では外国の人たちと過ごしてたんだけど、やっぱり土日は親の友達とその子供たちとの付き合いが多かった。

—こっちは家庭に一台電話があるけど、向こうはそうじゃなかったから、友達と連絡取り合うのは車で行ったりしてたし。(事例9)

\* どんなどころだったんですか?

—たまにあなた方テレビで見るとじゃないかな。大平原にカーボーイがね馬に乗ってね、なにもない草原のようなね。道は舗装されてなくてね、土ほこりをあげて馬が走っていくね。そういうイメージ。そういうところに、ぼつんぼつんと家がある。小さな集落もある。そこに10年いたね。何をしていたかというとおじさんのところでカーネーションを作っていた。(事例10)

—あっちは生活がゆっくりしているし、人間らしい生活ができるし、こせこせしていないし、農業でも日曜は休める。まあ治安がちょっと悪いけどね。当時は警察があんまりちゃんとして

なかったから。だから大体の家は犬を飼っているんだよ。知らない人が来たら噛みつくように躡ける。家には3匹いたよ。(事例9)

最初は日本とまったく違った環境、言葉、文化の中で驚きや苦勞を感じるものの、生活が安定してくるとむしろアルゼンチンの風土や文化は肯定的なものになってくる。

その後の現地での生活、仕事、宗教等についての語りは全般に悪いイメージはない。

—アルゼンチンは衣食住には何も不自由は無い国で、その点で困ることは無かった。1953年に結婚した。その後、14年間は農業で野菜作りをしていたよ。14~15人程の従業員を雇い、お給料を支払った。大型の畑で、ホウレンソウ、ニンジン、キャベツなど、あらゆるものを栽培していた。

—交通の便は不便な国だったが、大型トラックで毎日ブエノスアイレスまで野菜を運んでいた。休む暇は無いが、お金は儲かった。その後は帰国するまでクリーニング屋を経営。農業は力仕事で年をとってからは辛いのと、子供に農業をつがせない為にクリーニング屋を始めたんだ。

—移住した直後は花作り、カーネーションね、向こうはどこもハウス栽培だった。親戚の家では家事の手伝いをしてた。仕事といえば花作りか洗濯屋だった。

—アルゼンチンではよく花が売れた。贈り物にも、お墓参りにでも、とにかく何かあれば花を持っていく。日曜になると、家族でお墓を掃除して花を飾る習慣があるから。それが楽しみでもあるわけ。お墓の前でマテ茶を飲みながら死んだ人と時間の限りお話しするの。(事例4)

次の事例は、アルゼンチンではなくペルーであるが、農業から会社を興し、沖縄とを往復し

ながら現地に基盤を作った所で戦争で中断されるという、かなり活動的なタイプである。

—最初移民として農業をしていて最初カサブランカに行ったらいいんだ。結局農業では飯が食えないってことで、リマに出てきてお店したんだよ。そんときのお店なんだっけ？

—味噌醤油総会株式会社だよ。そのあとリマ日報に入社した。日本系の新聞社だよ。

—最初は農業して、カサブランに入植して、リマで味噌醤油やって、その経験を生かして、こっちで酒造作った。いったん沖縄帰ってまたペルー戻って子どもたちはこっちにおいといて、またリマ日報で働いて、社長までいった。支那事変が起きて、太平洋戦争前に。日本は中国に軍隊送り込んで、そのときに沖縄に視察しに来てただけどそれから戻れなくなってしまった。(事例5)

—カサブランカに日本の移民の会社が斡旋するところがあって、そこで募集されて行く。いい条件で募集がかかるが、行ってそこで生活できないから、契約だから辞めるわけにもいなくてリマに逃げるしかなくなる。そこには砂漠もあるがそこで亡くなった人もいるみたいだ。みんな親戚がいたりするところに逃げる。言葉も通じないし奴隷状態だし、逃げるしかなかった。移民したひとたちは沖縄で子供養うことができないから。沖縄だったら農業も出来ない。南米行ったら大きな農場がある。毎日毎日故郷のことを思い出して、泣いて暮らしてた。再度こうして来るときに話がある。それで、何十年農業をやって、それでも収入は上がらないので、ただ毎日の仕事やるけど、食べるだけの収入しかない。それではいけないということで、アルゼンチンの人に、もう思い切ったあの土地はみんな売って、みんな洗濯屋さんになったみたい。(事例5)

日系移民が洗濯店を開業し、そこに知己のある後続の日系移民を従業員とすることで、生活形成をした事情には、ブエノス・アイレスなどの大都市でクリーニングへの需要が高まっていたこと、小資本でも開業でき、身体を激しく使う仕事ではあるが、スペイン語に習熟していない日系移民に向いていたことなどがあげられる。

—ああ、あちらの生活はね、洗濯屋でしょ。向こうはね、午前中仕事あるでしょ。とても儲かるみたい。向こうはね、アルゼンチンの住民は、自分たちで洗濯しない。下着までみんなクリーニング出す。だけど今はそうじゃない。もう自分たちでやって、もうあがったり。この洗濯屋は。だから、日本から行った方なんかは、ほとんどがクリーニング屋で、生活やった。彼女が行った当時は、こんなだったから、日本人みなこれで儲かったみたい。生活してみな大きな家つくって、あれだけど、今はもう大きな家も住んでるみたいだけど、みんな生活も四苦八苦みたい。

\*じゃあ今はもう自分で洗濯やって？

—今はもう時代が変わって、だから向こうも不況でね、自分たちでやってる。もう一切がっさい、上から下着まで全部、あの洗濯屋に出しよってたって。

\*あの、初めに農業をやってらした、貧しい生活だったのに、ちょっとクリーニング屋さんに移動したということなんですか？

—場所的にはね、家は、あれ達が行ってた時期の、農業してる時、並里からだいたい那覇あたりまで、離れてた。そしてお家はね、こっちに一軒があったら、農家だから、また一里ぐらい離れたところに、また一軒がある。だからもう、他の人とも交流がないわけ。(事例6)

—よく魚釣りに行ったね。釣りに行くために

600キロ移動したよ。一泊二日でね。よく魚がとれたから…東京は道が狭い。向こうは幅が100メートル、いやもっとあるからね。(事例4)

—結婚するときにキリスト教にはいったね。式をあげるために。

\*休日には礼拝に行っていたのですか？

いや、洗礼を受けないと結婚できないから入っただけだから。それはなかったね。向こうも日本と変わらず色々な宗教があるよ。仏教も創価も。(事例4)

### 3) 戻ってきた理由

長期の移民生活を経て沖縄に戻ってきた人、あるいは現地で生まれ育った家族を連れて戻った人は、どのような理由から帰国したのか？これはもちろん、人によりさまざまな個別の事情があると推察されるが、インタビューの複数の語りの中でいくつか共通する理由付けがあった。

\*こちらに戻ってきたのはどういう理由で？

—私たちの家は沖縄の尚という王様の頃から13代から14代続いていて、ここの長男だからどうしても帰ってこないといけない。また、渡るときに10年は行って、金持ってきて成功したら帰ってくると、そういう約束で。

\*じゃ、初めから10年したら帰ってくるつもりだった？

—そういう約束で行ったんですから。はい。

\*でも結果的には20年いることになったと・・・。ご長男で、いずれはこちらで家の跡を継ぐということ・・・お父様たちはそのままあちらに残っているんですか？

—はい。親戚もみんないます。

\*そういう方はかなり多いですか？このへん、今帰仁の中では。行って何年かしたら帰ってくるとい・・・。

—多いですよ、あまり帰ってくる人はないです



ね。こっちから若い時に行くのと向こうで結婚して子供も生まれる。子どもはアルゼンチンのスペイン語教育を受けてますから。自分たちもずいぶん反対しましたよ。帰ってくるの。(事例2)

この場合は、先祖の位牌(トートーメ)や墓を守る役割としての長男だから、という理由があげられている。さらに長男以外の場合も、一族がみな移民で海外に渡り、先祖の守りを担う者がいなくなるような場合、一族の誰かが戻ってくるような要請がなされる例もある。

しかし、それとは別の事情もある。

—こっちに帰ってきたのは向こうで詐欺にあったからなんだよ。なんていうの、投資信託詐欺みたいなの。もうこっちに帰ってきて20年経つよ。帰ってきたとき子供は8才と4才だった。(事例4)

—だって大変でしょ、あっちの田舎は雨が降ったらぬかるんで、晴れたらほこりが舞う、冬は寒くて霜が降りる。それでも畑仕事。収入が少なくても街に出て、そのほうがいいよって。田舎で儲かって都会に出ていく。田舎10年、クリーニング5年。

—そう15年。女性を見る目がなくて(笑)結婚しないどころって。そしたら沖縄にいたお父さんがきて。

\*アルゼンチンにですか?

—そう、ひょっこり来て、移民局へ行って、一時帰国をするからって。で親父と一緒に帰ってきた。そういうひとがいっぱいいるわけ。ちょうど僕が帰ってきた時はね日本は高度成長期でもすごい景気があった。30年前。80年代。すごい景気だったよ。道路がアスファルトになってるさね、伊豆見も変わったねって。移民して50年帰国をしないで、そこで亡くなった人もたくさんいる。(事例10)

1970年代後半という時代は、日本の経済成長、沖縄の日本への復帰、それに続く経済振興策によって、移民に出た当時の戦後沖縄とは姿を変えた経済的な豊かさを示していた沖縄の状況と、それとは対照的にアルゼンチンは軍事政権とペロン派のクーデターやさらなる弾圧といった政治の混乱、1982年のフォークランド紛争、巨額の対外債務や900%のインフレといった経済の破綻の中にあった。経済の混乱と治安の悪化は、日系移民の生活にも影響を与えていたはずであり、こうした背景の中で、故郷の伝統としての家意識が呼び覚まされることにもなったといえようか。

\*さきほど家督を継がなければいけないという話が出ましたが、これはどなたが強くおっしゃったんですか?

—みんな、それはこのへんの習慣で、家督をずっと継ぐのは長男と決まっている。どうしようもないですけどね。絶対そうしろと。子どもたちにもそう教えているんですけどね。世の中が変わって、もう次男でも女の人でもいいとやるんですけどね、私は反対です。万世一系ずっと教えられてきたものが途中で変わっては何にもならんでしょ。(事例2)

#### 4) 南米での移民経験への評価

それぞれの時点で、移民を取り巻く条件は変化しているから、現在からそれを振り返ってどういう評価をするかは、過去のある時間を生きていた時に感じ考えていたことと同じとは言えない。逆に言えば、今現在がどのような生活であるかが過去の自分の生活への意味付けにも影響する。そういう意味で、インタビューで語られた多くの評価がアルゼンチンは良かった、ゆったり暮らしやすい国だったという言葉を口にしたのは、自分が渡航した当時の沖縄の生

活、日本本土の生活、そしてそこから渡った南米の他の国の生活イメージと比較して評価していると考えてよいだろう。

とくに、ブラジルやボリビアなどから転住した人が相当数いるアルゼンチン日系社会では、南米の中でもアルゼンチンが一番いいのだ、という身びいきな言説が流布していた可能性がある。

一移民の経験は、振り返ってみて良かった。アルゼンチンはいい国だったので、帰りたくなかった。アルゼンチンには約3万人の一世沖縄人がいて、心細さが無かったこと。また、たくさんの組織があり、コミュニティーに参加できるので、たくさんの友人が出来た。商売も繁盛していたので、お金には困らなかった。アルゼンチンは天災も無く、暮らしやすい国だった。(事例7)

一食事とか家電製品がとても充実していた。南米でもアルゼンチンはヨーロッパからの影響があったもんで、ブラジルやボリビアなんかとは全然違った生活だったね。アルゼンチンが1番良かったかな。(事例4)

一もう、今帰ってきてても会えない。もうみんなね、家移住の構えだから、もう子供が出来て孫出来て、みなひ孫までもうみな出来てるから、向こうに。あっちがもう第二の故郷であるわけ。アルゼンチンが。ここの部落たくさん行ってるよ。アルゼンチンに。だからもうみな帰らない。ペルーとかアルゼンチンに。本当は向こうに出たのは、お金を稼いで一旗揚げて故郷に帰るつもりでみな出たんだけど、それがもう思うようにいかないからね。それでもうみな家移住の構えになって。でももうみんなもういい生活してるみたい。

\*じゃあこっちに帰りたいけど帰れないというわけではなくて、あっちの生活がもう築かれているから…

一そうそう。もうみんな向こうにもたくさんの友達が出来て、結局故郷を離れていったら親戚じゃなくてもみな親戚になるからね、やっぱりね、仲はよくなるさ。で、もう離れられなくなるわけみな。こっちきたらまた、たくさんいらっしゃりはするけど土地も買わなきゃいけないし、再出発はできないさ。もうみんな年寄りだから。だからもう向こう。また、子供たちが来るといっても言葉がわからん。生活習慣がまるっきり違うからね。子供たちはもうみんなNOであるわけ。みんなこっちに来ないというわけ。

\*そういうことだと、やっぱり向こうに移民してそれで成功してよかったっていう、振り返ってみるとやっぱりそういう結果になりますかね？

一そうではあるけど、やっぱり故郷っていうのは忘れられないみたい。(事例6)

このような当事者としての移民経験の評価は、きわめてプライベートな場所から発しているだけに、それぞれの時代を反映した歴史的経験を端的に示している。それでは次に、家族単位、村落単位の移民経験を、典型例を手がかりにネットワークとして考察してみたい。

#### 4. 村落にとっての移民、家族にとっての移民

まず、われわれが確認できた限りで、沖縄本島本部町から戦前戦後を通じてアルゼンチンに渡った移民のデータから、どのような人が移民に出て行ったのかを考えたい。

表2は、「沖縄連アンケート」<sup>(3)</sup>から独自に集計した86件の本部町出身者データのうち、移民渡航の時点、最初の渡航地、渡航時の年齢、どういう契機で渡航したのか、つまり「呼び寄せ」等の縁故を整理して示してある。

これによれば、移民渡航のピークは戦前の

沖縄からの南米移民の血縁ネットワーク

表2 本部町からのアルゼンチン移民渡航時期と年齢

西暦	元号	件数	最初の渡航地	渡航時の年齢	縁故等
1905	明治38年	1	チリ・バル・パラソ	12	同学の友人と
1918	大正7年	1	ブラジル・パセナ	25	船乗組員から
1919	大正8年	1	ブラジル・パセナ	23	契約移民
1927	昭和2年	3	アルゼンチン	24,24,20	同郷の知人を頼る
1928	昭和3年	3	アルゼンチン	24,23,18	同郷の知人を頼る
1929	昭和4年	2	アルゼンチン	25,25	自由渡航1
1930	昭和5年	3	アルゼンチン	19,39,33	兄弟を頼る2
1931	昭和6年	6	アルゼンチン	42,20,28,20,29,19	同郷の親族・知人を頼る
1932	昭和7年	1	アルゼンチン	25	親族を頼る
1933	昭和8年	1	ボリビア	26	自由渡航1
1934	昭和9年	4	アルゼンチン3ボリビア	16,17,22,19	兄弟・従兄を頼る3花嫁1
1935	昭和10年	7	アルゼンチン	19,38,20,22,21,20,19	兄弟・従兄を頼る
1936	昭和11年	2	アルゼンチン	24,19	兄弟・伯父を頼る
1937	昭和12年	4	アルゼンチン	31,19,25,22	兄弟・親族を頼る
1938	昭和13年	4	アルゼンチン	17,24,17,23	父を頼る2、親族を頼る2
1939	昭和14年	1	アルゼンチン	16	兄弟を頼る
1940	昭和15年	4	アルゼンチン	17,17,22,16	父を頼る3
1941	昭和16年	6	アルゼンチン4ボリビア	15,17,16,23,28,22	父を頼る3、兄弟2、花嫁1
1942	昭和17年	2	ボリビア、ペルー	19,21沖縄出国時	兄弟を頼る
戦前計		56			
1949	昭和24年	2	アルゼンチン	19,35	父・従兄弟を頼る
1950	昭和25年	4	アルゼンチン	22,15,27,19	父を頼る3子を頼る1
1951	昭和26年	8	アルゼンチン	21,21,22,24,22,23,29,18	父・兄弟・従兄弟を頼る
1952	昭和27年	3	アルゼンチン2ボリビア	22,44,16	契約移民1伯父・知人を頼る
1953	昭和28年	1	アルゼンチン	39	兄を頼る
1954	昭和29年	2	アルゼンチン	29,33	養父・子を頼る
1955	昭和30年	3	アルゼンチン	28,21,26	兄・子を頼る
1956	昭和31年	1	アルゼンチン	28	兄を頼る
1957	昭和32年	1	アルゼンチン	23	父を頼る
1958	昭和33年	1	アルゼンチン	32	兄を頼る
1962	昭和37年	2	ペルー1アルゼンチン	22,38	娘・兄弟を頼る
1967	昭和42年	2	アルゼンチン	66,25	子・兄を頼る
戦後計		30			

2008沖縄連アンケートより集計（他に渡航時期不明のケースが12ある）

渡航時点（船名）が確認できる家族あるいは個人を1件とした

年齢は渡航時の満年齢だが、他国を経由して転住した場合は日本を出た年齢にしてある

1930年代から戦争が始まるまでと、戦後の渡航が再開された1950年前後にあることがわかる。もちろんこのデータは、現在もアルゼンチンに在住している移民、それも本人は既に死亡している人の子孫の回答であるので、途中で帰国し

た例や家族を形成することなく病気や事故で命を失った人は含まれていない<sup>(4)</sup>。

また、ほとんどの事例は呼び寄せなど既に先行してアルゼンチンに渡航していた親族などを頼って移民していることが分かるが、初期はチ

りからアンデス山脈を越えた例や、ブラジルやボリビアなどから転住した例がみられる。これは集団移民船で渡航し、指定された移住地を悪条件のため逃げ出したものであろう。

渡航時の年齢は、10代後半から20歳代が圧倒的で、30代以上は戦前で5人、戦後も6人しかない。全体で12.8%程度ということになる。なお、最後の1967年に66歳で渡航した女性の例は、夫婦で沖縄に残り暮らしていた夫に死別した結果、早くアルゼンチンに移民した子や孫に呼び寄せられたという特異な事情であり、沖縄にも日本にも彼女を支える家族はもういなかったということになる。

移民の契機となった縁故などをみると、まず多いのは先に移民した兄を頼る、あるいは父を頼るというものだが、先の長子相続を基本とする家意識からすれば、跡継ぎでない次男三男がまず海外に出て一定の生活基盤を築いている場合、その弟や妹は有利な条件で渡航することができる。父を頼る場合は、すでに沖縄で結婚して家族を作っていた人が先行して活路を開くため移民し、やがて現地で生活のめどが立ったところで家族を呼ぶという形だと考えられる。結婚相手と呼ぶ花嫁移民も当然この流れの中で起ることである。

伯父や従兄弟を頼るというのもこのヴァリエーションだろう。数世代にわたり兄弟数が多いからこそ可能なことともいえるが、拡大家族のネットワークを最大限活用すれば、移民のチャンスは個人にとっても人生の可能性を広げる絶好の機会であったはずである。

戦前には血縁とは別の同郷の知人、あるいは学校で知り合った友人を頼るという例があり、完全な単独の自由渡航という例も少数ながらあった。この場合は「呼び寄せ」ではなく、契約移民であれば移民船に乗る条件である夫婦または家族同伴でないと難しいから、ブラジルな

どからの単独転住か、偽装結婚で渡航した人などかもしれない。

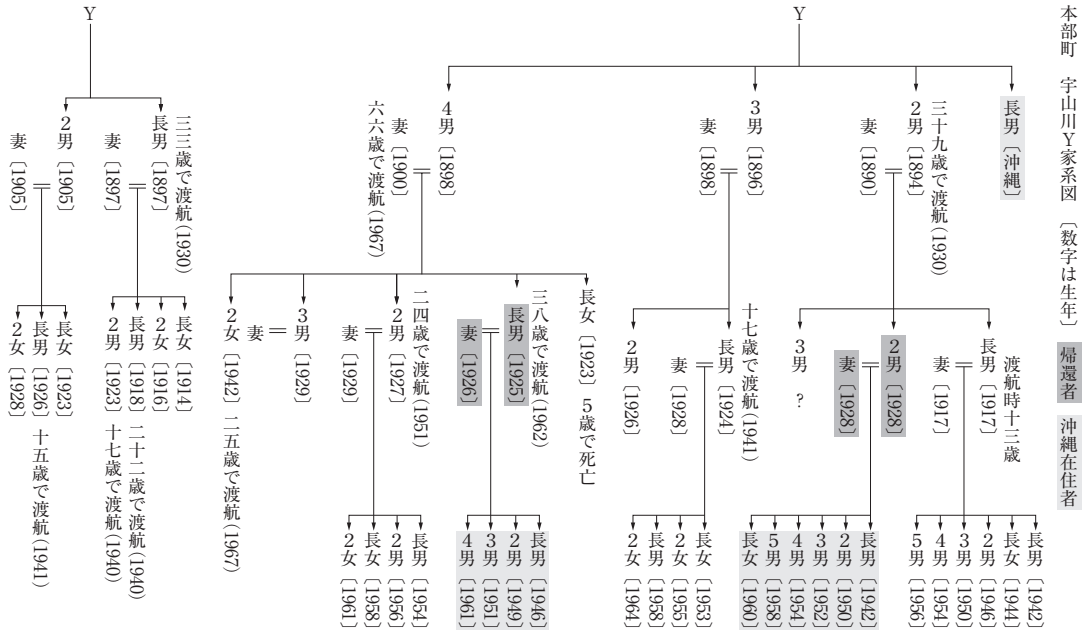
半世紀以上も昔のことでもあり、これだけのデータから、それ以上のことを推測することは難しいが、ここで注目しておきたいのは、移民を選択した人たちは本部町の村落レベルで考えたときに、どのような特徴をもっていたのかという点である。社会階層的な位置づけはこのデータからはわからない。

ただ、1930年代までに先駆的に南米に渡航した親族があり、そのネットワークを通じて後続の移民を送り出すためには、日々の生活維持だけで精一杯の貧困な条件では無理で、個人の能力において遠い異文化社会でも頑張って生き抜くだけの健康な体力知力を備えていなければ不可能だったということは推測できる。

最後に、本部町のある村落からアルゼンチンに渡航して家族形成をし、その後も親族を呼び寄せて生活の基盤を築いた一族の例をひとつあげてみよう。図2はYという先祖を共通とする一家の系図(図2参照)である。

この家は、やはり琉球王朝に仕えた親方層に繋がる系譜をもつが、この系図からは1930(昭和5)年にアルゼンチンに39歳で13歳の長男はじめ家族で渡航した二男の一世夫婦から始まり、以後この兄を頼って弟(3男)の長男(17歳で渡航したこの長男はやがて戦後の日系人社会で成功し、「沖縄連」の幹部となっていった)、4男の長男と続いて渡航した世代、さらに続々と移民していった親族と現地で生まれたその子の二世世代が次々に増えていった軌跡を辿ることができる。ただし、アルゼンチンで家族形成した移民の一部は沖縄や日本に戻る例があり、Y家でも2男の2男一家と4男の長男一家は、アルゼンチン生まれの家族をともなって沖縄に戻っている。これがどのような理由で戻ったかは不明であるが、一族の誰かが戻っているとい

図2 Y家系図



う点では興味深い。

戦後のアルゼンチンで、日系人社会を担っていく中核が、この10代で親に連れられて渡航した人々とその二世の世代になる。この系図では個々の名前を示していないが、一族のアイデンティティを象徴するのが、同じ一文字を共通に使う「通字」の伝統的習慣であり、この系図に載っているすべての男子には同じ知という字が共通する。また、その配偶者はすべて沖縄出身の女性である。これはこのY家だけでなく多くの沖縄出身の移民に広くみられる事実であり、二世、三世世代になると現地の他県出身者との通婚、さらに日系人以外との結婚も出現してくるが、その場合は「外人」とのみ記載されている。

このような命名における伝統遵守、男系長子相続の強い同族意識と通婚圏へのこだわり、先に見た位牌や墓を誰かが守っていくという規範が、果たして今でも維持されているのかどうか

は、われわれのデータの範囲を越えるので、まだ何ともいえない。ただ、インタビューの過程で、現代の沖縄ではそのような習慣はかなり崩れているという話も出ていたので、むしろアルゼンチンや海外の日系社会の中で、逆にそうした伝統的家族規範が伝承され保存されているのかもしれないという仮説は立てられる。

一方で、アルゼンチン生まれの二世、三世世代ではスペイン語の教育を受け、現地の文化に同化する傾向もあり、たとえば子の名前に関しては、出生時の戸籍届やその後の生活において洗礼とクリスチャンネームをもつことが必要であることから、フーリオ、フェルナンデス、アナマリヤなどの名をつけている。マージナルな移民の存在には、名前以外にもさまざまな文化的二重性は必然的に生起することは、日系移民に限られないが、スペイン語しか話せない世代が多数派になっている状況は、日系社会そのものが変質していく必然性も予想される<sup>(5)</sup>。

5. おわりに

最後にこの小稿のまとめとして、沖縄からのアルゼンチン移民を念頭に置いた図3の概念モデル図式を作ってみたので、これに沿って述べよう。これは実際にあった事実から出てくるものではなく、あくまで移民現象に関する概念モデルであることを断っておく。

移民元である沖縄の村落が下段にある。上段は移民先のアルゼンチンである。左側から3段階で移民の初期、中期、後期というパターンになる。移民の初期は十年ほど頑張っで送金し、いずれ成功して資産を手にしたら故郷に戻る、という出稼ぎ動機による意欲的な若者世代の移民が出た時期である。次の中期では、移民先での生活基盤が固まり家族を形成して一定の安定を得るとともに、兄弟・親族から協働者や配偶者候補を呼び寄せるといった段階になる。同時に、血縁親族ではなく同郷者集団としての村落県人会の地縁ネットワークや、農業や洗濯業などの職域ネットワークのつながりを強めて「日系人社会」が成立する。

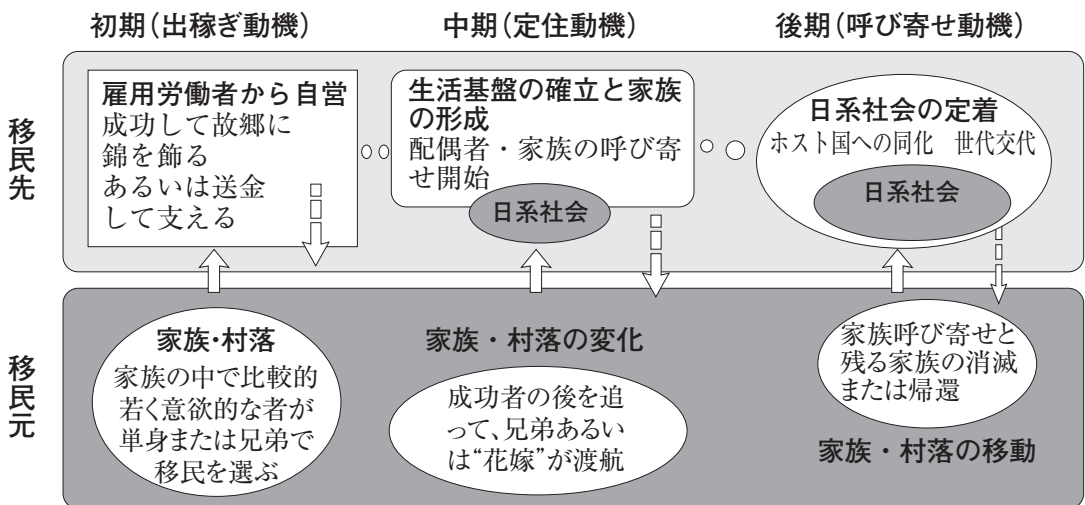
さらに後期になると、移民先であるホスト国への定着が進み、日系社会が組織化されて一定

の地位を確保するようになる。それは同時に移民の世代交代を促し、一世中心であった故郷固有の文化の伝承・継承が変質してくる過程でもある。その段階では、故郷に残っている親族との関係はどうなるだろうか？成功した移民家族であるほど、呼び寄せが進み一族の大半が移民し、移民の親世代が死亡するような例が増える。そのときに先祖の位牌や墓を誰が守るか、というような課題が発生する。このサイクルは時間的におよそ30年ほどの1世代分になるだろう。

この時点で起ることは、さらにいえば、移民元のルーツとしての故郷と国家との関わりを、移民子孫が限りなく希薄化していくのか、あるいは理念的にせよ意図して積極的にアイデンティティ継承を図るのか、という問題につながっていくだろう。

しかし、いまはそこまでの考察は控えたい。このモデルからすると、沖縄からのアルゼンチン移民の場合、いくつか特殊な歴史的要因が介在することによって、変形していったと考えることができる。ひとつは、この初期から中期にさしかかったところで戦争による断絶期が挟ま

図3 移民送出のモデル



り、故郷沖縄が沖縄戦という激しい破壊と戦後占領の荒廃に晒されてしまったことである。この特殊事情は、結果的に呼び寄せ移民の促進という形で働いたといえよう。つまり、故郷に残った家族の窮状を移民に呼び寄せることで救う、という双方の動機があった。

アルゼンチンでは北米やブラジルにみられたような戦争による日系移民のホスト社会からの隔離や差別といった迫害経験はごく微かなものであった。そのことも移民のアルゼンチンに対する好意的な評価につながっていると思う。白人キリスト教国へのアジア系移民の歴史につきまとう民族差別や宗教的偏見は、アルゼンチンの場合当事者には無視できるほど軽微であったという多くの証言がある（もちろんそういう偏見がなかったとはいえない）。いわばホスト社会の中で、日系移民は自分たちの生活向上を個々の努力で必死に追及するだけの自由は確保していたのであろう。

もうひとつ歴史的要因として大きな意味をもつと考えられるのは、戦後移民が多く渡航した1950年代以後の日本と沖縄とアルゼンチンの立場の変化である。1960年というひとつの時点をとってみると、日本はまだ政治的軍事的にはアメリカの強い影響下にあり、沖縄は日本ですらない。アルゼンチンはヨーロッパの戦後復興に食糧を供給する余裕のある富裕国だった。可能性を求めて日本から飛び出した有能な若者は、アルゼンチンに夢を賭けた。しかしその時の日本はようやく高度経済成長にさしかかっていた。

故郷の家族を送金や呼び寄せによって余裕をもって救ってあげたはずの日系社会は、十数年後の1970年代には立場が逆転する。沖縄は日本に復帰し、米軍基地はあるものの発展する日本経済の余沢を享受して、海洋博と建設ブームに沸く。日本に帰った方がもしかしたらよい生活

があるのかもしれないと思わせる状況を見ると同時に、変貌する沖縄にはもはや昔の故郷の面影は急速に失われていくという印象をもつ人もいた。現実が多面的である。

そして次に来たのが、1980年代の日本の経済大国化、アルゼンチンを含む世界への日本企業の進出だった。グローバル資本としての日本企業は、日系社会が長い労苦の果てに定着している南米をビジネスの手がかりとして援助し利用しようとした。日系社会の人々は、遙かな祖国のパワー増大に誇りを感じたのかもしれない。しかし、移民の子孫が今度は出稼ぎ労働者として日本に行ったとき何が起きたのか？

しかし、これ以上はこの小稿の扱う範囲を超えている。われわれの収集したデータと聴き取り調査結果から言えることはごく限られた事実には過ぎない。

付記：本稿のもととなった2008年のアルゼンチンでの調査、および2008～09年の沖縄県本部町での調査で、インタビュー、資料提供等にご協力いただいたすべての方々に改めて感謝申し上げます。また、研究プロジェクトとして助成をいただいた明治学院大学社会学部付属研究所にお礼申し上げます。

#### 【註】

- (1) 1919（大正8）年に「中城村人会」が発足したのを皮切りに、村人会、町人会が続き、「沖縄連」は戦後の1951年5月に「在亜沖縄連合会」として設立。「日本人会」はこれに先立ち、1916年発足の「在亜日本人青年会」から改組した日本人会が1921年に成立。（社団法人沖縄連編『アルゼンチンのうちなーんちゅ』1994年）。
- (2) 1960年時点の経済統計では、一人当たり国民所得で比較すると、アルゼンチンが日本の1.6倍、ブラジルは1倍程度である。
- (3) 移住百周年を記念する行事のために「在亜沖縄県人会連合」がアルゼンチン在住日系人に対して2008年に行っていたアンケート。筆者はプエ

ノスアイレスで沖縄連から許可を受け、本部町出身の日系移民についてアンケート結果を集計閲覧させていただいた。

- (4) 「沖縄連」移住80周年記念誌「アルゼンチンのうちなーんちゅ」に収録されている事例には、結核で死亡した日本人移民やブエノスアイレス路上で孤独に死亡した元タクシー運転手の移民がいたことが記されている。
- (5) それは例えば日本人子弟の教育のために作られた日本語学校が、現在では生徒の多数は日本語学習を求める日系以外のアルゼンチン人が占めていることに象徴的である。また日系人を情報的に結んでいた現地日本語新聞が、国際テ

レビやインターネット普及によって皮肉にも衰退していることもその一例になる。

**【参考文献】**

- アルゼンチン日本人移民史編纂委員会『アルゼンチン日本人移民史』（第一巻戦前編、第二巻戦後編）（社）在亜日系人団体連合会、2002年。  
（社）在亜沖縄県人会連合会『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』1994。  
水谷史男「南米への日本移民の定着過程」明治学院大学社会学部附属研究所年報39号、2009.3。  
水谷史男「沖縄南米移民の動機と背景」明治学院大学社会学部附属研究所年報40号、2010.3。ほか